様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３５０９４２

研究課題名（和文）小学校１年生の読み書き能力に関する幼児教育環境の検討

研究課題名（英文）The effect of childhood's reading environment on first-grade children in literacy development.

研究代表者
白川　佳子（Shirakawa, Yoshiko）

共立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：２０２５９７１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：家庭と幼児教育の文字環境が、小学１年生の読み書き能力とどのように関連しているのかを検討することが本研究の目的である。小学１年生1,295名に対して読み書き検査を実施し、その保護者を対象として家庭の文字環境のアンケート調査を実施し、1,095名から回答を得ることができた。また、児童の出身園200園に対して園の文字環境についてのアンケート調査を実施し、101園から回答を得ることができた。小学校１年生の読み書き能力に対して家庭の文字環境の影響、特に、家庭における読み聞かせの影響が小学校就学後の読み書き能力に影響することが明らかになった。

研究成果の概要（英文）： This study aims to clarify how home-ECEC reading environment in early childhood and the first grade affects first-grade children in literacy development.
Subjects: 943 pairs of parents and their first-grade children in fifteen primary schools. We conducted a questionnaire survey to parents to find out their children's reading environment at home, and evaluated children's literacy by "word recognition", "listening", " looking for the differences of sound", and "reading sentences".Parents who value "Imagination and parent-child relationship" tend to use the library more frequently than those who value "Reading comprehension".The children whose parents read books in their childhood have high-level listening and reading comprehension skills, whereas children whose parents still read books have low-level skills. The children reading a lot tend to have high-level listening skills.

研究分野：臨床発達心理学

キーワード：読み書き能力　文字環境　小学校１年生　読み聞かせ　幼児教育環境　家庭環境

１．研究開始当初の背景

(1)幼児教育の質についての研究

欧米においては、教師の特徴、教育レベル、保育室の子どもの人数、カリキュラム、相互作用の質などの幼児教育の生態的な特徴が子どもの学力や認知スキルにどのような影響をもたらすのか検討した研究(Mashburn, A.J., & Pianta,R.C., 2010)や小学校就学前の幼児教育の経験が入学後の子どもの全ての発達を高め、特に、不利な家庭環境の子どもに効果があることや、幼児教育を受けた期間が長い方が文字能力や算数能力の向上に効果があることを示唆した研究(Sammons, P.,2010)など幼児教育の質について検討した研究がある。

しかしながら、日本において幼児教育の質を検討した研究は少ない。内田伸子らの研究(2009,2012)は、日本、韓国、中国、ベトナム、モンゴルの五カ国のリテラシー調査において幼児教育の質についても扱った研究である。内田らは、幼児期の語彙能力と書き能力（図形模写の能力）が小学校の国語学力や語彙力に影響することや幼児期の保育施設の保育スタイルや家庭のしつけスタイルが小学校の国語学習と語彙力に影響することを明らかにした。これらの研究結果は、小学校就学前の幼児教育や家庭のしつけが小学校の読み書き能力を含む学力に重要な影響をもたらすことを示唆したものであるが、国際比較研究であったため、日本国内の地域差を考慮に入れておらず、幼児教育の質について詳細に検討した研究ではなかった。

(2)子どもの言語能力の発達に関する研究

我が国において、子どもの言語能力の発達に関する研究としては、高橋登(1997)の幼児のことば遊びの発達に関する研究、高橋(1995)の学童期の子どもの平仮名と漢字表記の処理過程についての研究があり、さらに、高橋(1996)は就学前の年長児から小学校１年生までの子どもの読解能力の獲得過程を縦断的に検討している。しかしながら、高橋の一連の研究は、子どもの言語能力の発達に焦点を当てた基礎研究であり、幼児教育の質や子どもの言語能力の発達に影響する家庭環境などの外的な要因について検討したものではない。

(3)子どもの活字接触に関する研究

子どもの学力の基盤となるものは、幼児期から習得が開始される読み書き能力や語彙力であると考えられているが、現代の日本では、乳幼児期から多くの家庭で絵本の読み聞かせが日常的に行われており、子どもが活字に触れる機会を与えるものである。絵本の読み聞かせの効果については、乳幼児期の読み聞かせの頻度が就学時期の子どもの語彙能力や言語能力を予測するという欧米の研究結果がある(Mol, S. E., & Bus, A. G., 2011; Robbins, C., & Ehri, L., 1994 他)。一方、日本においては、ベネッセ次世代研究所(2012)が、幼児期から小学１年生の母親を対象に子どもの学びと親のかかわりや意識についてアンケート調査を実施し、親が子どもに絵本や本を読み聞かせる頻度が高いほど、子どもが一人でも絵本や本に親しむ頻度が高くなる傾向があることや幼児期に文字・数に親しむ習慣があるほど小学１年生での家庭学習に向かう姿勢が高い傾向を見出した。これらの研究結果は、幼児期の絵本の読み聞かせを含む文字環境が小学１年生の学習意欲に影響をもたらすということを示唆するものであるが、小学１年生の学習意欲については母親へのアンケート調査からの結果であり、実際の児童の読み書き能力との関連をみたものではなかった。

(4)幼保小連携に関する研究

我が国における幼保小に関する研究では、小１プロブレムの問題、子ども同士の交流、教師同士の交流、カリキュラムの一貫性の観点から検討されたもの(例えば、上野ひろ美,2007;岸井慶子,2009;林浩子,2007;　白川佳子ら,2009,2010)や幼保小連携の実態調査（例えば、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター（無藤隆）,2003; 松嵜洋子ら,2008)があるが、幼小連携の観点から子どもの読み書きなどの認知能力の発達を検討した研究はない。現在、幼保小連携の推進は幼稚園教育要領や保育所保育指針においても明記されている重要な事柄であるが、幼稚園や保育所において小学校教育の教育内容が幼児期の「学習の芽生え」を意識してなされているのか、そして、小学校では幼児期に育ったインフォーマルな学びの芽生えを意識して自覚的な学びとしてなめらかに接続しているのか、さらにそれらが小学校１年終了時の読み書き能力に影響しているのかについての実証的研究はなされていない。

２．研究の目的

小学校就学前後の子どもについては、言語能力の発達に関する研究、活字接触に関する研究、幼保小連携に関する研究などがなされてきたが、我が国では幼児教育の質について検討された研究は少ない。

そこで、本研究では幼児教育の質が小学校１年生の読み書き能力に与える影響について明らかにすることを主な目的とする。具体的には、研究の期間内に以下の目的を明らかにしていく。

(1)保育施設（幼稚園、保育所）における保育のスタイル、絵本の読み聞かせの頻度を含む文字刺激環境の実態をアンケート調査によって把握し、小学校１年生の読み書き能力への影響を明らかにする。

(2)家庭における絵本の読み聞かせの頻度を含む文字刺激環境の実態をアンケート調査

によって把握し、小学校１年生の読み書き能力への影響を明らかにする。

(3)読み書き能力の高い子どもが多い幼稚園や保育所や低い子どもが多い保育施設を数園選んで視察し、保育環境や保育者の読み聞かせの様子をビデオ撮影して分析することによって、アンケート調査の結果を詳細に分析する。

(4)幼稚園や保育所の保育者にインタビュー調査を実施し、幼児期にふさわしい文字環境についてどのような考えを持っているのかを調べ、読み書き能力への影響を明らかにする。

(5)さまざまな地域で調査を実施することによって、幼児教育や家庭教育の地域差について検討し、地域差による多様な幼児教育環境が小学１年生の読み書き能力へどのような影響をもたらすのかについて明らかにする。

３．研究の方法

本研究は前述の目的を達成するために、福島、宮城、広島県において小学校１年生の終了時の読み書き能力の検査を実施するとともに、幼児教育環境の影響を調べるために、児童の保護者を対象に家庭の文字環境（塾・通信教育を含む）に関するアンケート調査、児童の出身幼稚園・保育所の保育者を対象に幼児教育施設の文字環境に関するアンケート調査をそれぞれ実施する。さらに、小学校１年時の読み書き能力が高い子どもが多い幼稚園・保育所を１園ずつ選び、ビデオ撮影や写真撮影など視聴覚機器を用いた訪問調査を実施し、児童の読み書き能力に関わる幼児教育の環境や保育の詳細について検討する。また、フォローアップ調査として、幼稚園・保育所の保育者に対して読み書き教育や文字環境についてのインタビュー調査を実施する。

＜研究対象者＞

(1)小学校１年生の読み書き能力検査（１班：25 年度実施、２班：26 年度実施）

福島、宮城、広島の小学校計 15 校において、１年生終了時期に 1,295 名を対象として読み書き能力検査を実施した。

(2)保護者アンケート調査

対象児童の保護者に対して、家庭における文字環境についてのアンケート調査を実施したところ、943 名から回答があった。

(3)保育者アンケート調査

対象児童の出身園の保育者に対して、保育施設の文字環境についてのアンケートを実施した。出身園 203 園にアンケートを郵送し、101 園から回答があった。回収率は、49.8%であった。

(4)保育施設の訪問調査（幼稚園１園、保育所１園）（26 年度実施）

(1)の読み書き能力の検査結果から、特徴的な保育施設を２園選び、訪問調査を実施する。

(5)幼稚園・保育所の保育者へのインタビュー調査

保育施設の訪問調査の際に、保育者にインタビュー調査を実施する。

４．研究成果

(1)小学校１年生のリテラシーに及ぼす家庭の文字環境の影響

①幼児期の文字環境と小学校１年生のリテラシーとの関連

小学校１年時のリテラシーと幼児期の文字環境の関係を明らかにするために、「ことばさがし」、「聞き取り」、「音調べ」、「文の読み①」のそれぞれの得点を平均点で折半し、平均点より高い群をＨ群、平均点よりも低い群をＬ群とし、幼児期の文字環境に関する各質問項目に対して t 検定を行った。その結果、「ことばさがし」では有意差はみられなかった。また、「文の読み①」では。それに対して、（園から絵本を定期購入や通販で購入以外で）絵本の購入で有意差がみられたのみであった。それに対して、「聞き取り」と「音調べ」では幼児期の読み聞かせの程度、幼児向けの絵本の冊数、図書館の利用頻度、就学前の週当たりの習い事の回数、及び「聞き取り」においては（園から絵本を定期購入や通販で購入以外で）絵本の購入で有意差がみられた。このことから、小学校１年時の「聞き取り」や「音調べ」のような聴覚的なリテラシーＨ群はＬ群と比べて、読み聞かせの頻度も多く、絵本の冊数や購入数、図書館の利用頻度などのような文字環境が豊かであったことが示された。

②-1 幼児期の読み聞かせと現在の読み聞かせや児童の読書・生活習慣との関連

幼児期の読み聞かせと現在の読み聞かせや児童の読書習慣および生活習慣との関連をみるために，Pearson の相関係数を算出した。その結果，幼児期の読み聞かせの程度は，現在の読み聞かせと正の相関があり，児童の読書習慣との間にも正の相関があった。また，子どもの生活習慣については，テレビ視聴やテレビゲームでの遊びとの間に負の相関がみられた。これらのことから，幼児期の読み聞かせが小学校入学後の読書習慣によい影響を与える可能性が示唆された。

②-2 現在の児童の読書・生活習慣と児童のリテラシーとの関連

現在の児童の読書習慣および生活習慣と

児童のリテラシーとの関連を検討するために，リテラシーの下位検査である「言葉さがし」「聞き取り」「音しらべ」「文の読み①」のそれぞれの得点について平均以上をＨ群，平均未満をＬ群とし，Ｈ・Ｌ群によって現在の児童期の読書習慣や生活習慣に違いがみられるかをｔ検定によって分析した(Table 1)。その結果，「聞き取り」では，現在の読書頻度および読書時間はＨ群がＬ群よりも有意に高く，反対に，テレビ視聴やテレビゲームはＨ群がＬ群よりも有意に低かった。「音しらべ」では，現在の読書頻度および読書時間がＨ群がＬ群よりも有意に高かった。「文の読み①」では，現在の読書頻度および読書時間，テレビ視聴頻度はＨ群がＬ群よりも有意に高かった。これらの結果から，音を聞き取り文字を認識する力や音声と文字情報を一致させる力を調べる「聞き取り」検査の得点が高い子どもは，低い子どもに比べて，小学校入学後に読書をする頻度や時間が長いことが明らかになった。さらに，幼児期の読み聞かせと現在の子どもの読書習慣との間に正の相関があることから，幼児期の読み聞かせは現在の子どもの読書習慣に影響を与え，そのことが児童期のリテラシー（聞き取り，音しらべ，文の読み）に影響を与える可能性があることが示唆された。

(2)保育施設の文字環境についての調査結果

年齢ごとの絵本の蔵書数は、年齢が上がるにつれて増加していることが分かった（図１)。約半数の園でクラスに 20 冊以上の絵本があり、100 冊以上の園もあった。

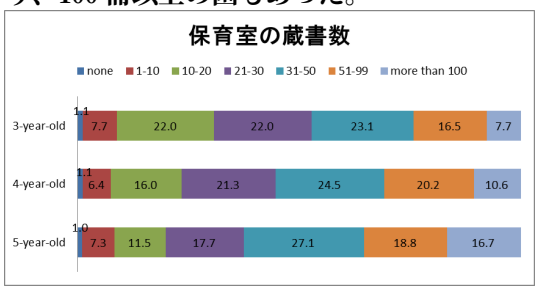

図１ 保育室の蔵書数

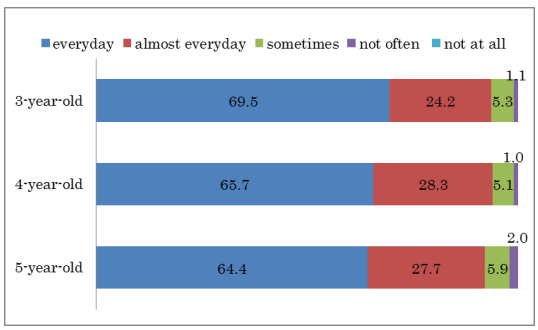

図２ 絵本の読み聞かせをする頻度

次に、図２には絵本を読み聞かせる頻度を示している。すべての年齢において、約 60%以上の保育者が毎日絵本を読み聞かせていることが分かった。「毎日」「ほぼ毎日」を合わせると９割以上が読み聞かせをしていた。

一日の読み聞かせの時間を年齢ごとに比較したところ（図３)、読み聞かせをする時間の長さは年齢が上がるにつれて長くなっており、「約 10 分」という読み聞かせ時間がどの学年でも最も割合が高かった。子どもの絵本への集中を考慮して、10 分程度が適切であるではないかと考えられる。

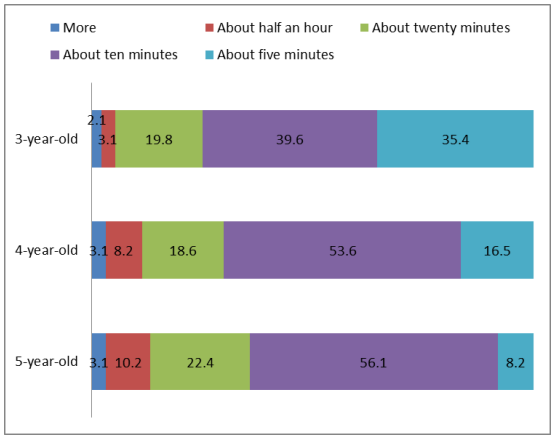

図３　絵本の読み聞かせの時間

読み聞かせをする際の保育者の意識を表１に示している。表１に示したように、カテゴリーⅠの「読解力習得重視」よりもカテゴリーⅡの「物語・ふれあい重視」の平均値の方が高いことが分かった。このことから、保育者は、絵本の読み聞かせをする際に、文字の習得を重視するのではなく、子どもたちに物語の楽しさを感じてほしいという願いを持っていることが推察された。

表１　読み聞かせに対する保育者の意識

Item	Average	SD
Category Ⅰ : Acquiring knowledge and letters		Avg.=3.50
1.Children increase their ability to focus	3.99	1.04
4.Children learn letters	2.61	1.11
7.Children expand their vocabulary	4.01	0.92
8.Children improve their reading skills	3.39	1.18
Category Ⅱ : Imagination and teacher-child relationships		Avg.=4.49
2. Children enjoy the world of books	4.87	0.37
3.Teachers like parens build a relationship with children	4.29	0.82
5. Children develop their imagination and have dreams	4.63	0.6
6.Children deepen their thinking	4.16	0.85

(3)幼稚園・保育園の文字環境に関する訪問調査と保育者へのインタビュー調査

小学校１年生のリテラシー調査の結果、リテラシー得点が高い児童の出身の幼稚園一園と保育園一園の文字環境について訪問調査をし、保育者へのインタビュー調査を行った。写真１，２は保育室内の絵本コーナーの様子、写真３は、保育者の読み聞かせの様子、写真４は、自由時間における子どもの読書活動の様子を示している。

訪問した園では、子どもたちが自由に読書できる絵本コーナーが各保育室に設置されており、自発的に読書をする姿が見られた。

中には、写真４のように絵本というよりも挿絵入りの児童書を拾い読みする幼児の姿も見られた。

保育者へのインタビューでは、絵本の読み聞かせについては毎日行っているという積極的な姿勢がうかがえ、また保育室内の環境の中にも子どもに向けたひらがなの掲示があり、子どもたちが自然と文字に触れる機会があった。保育者は子ども対して文字を習得してほしいと意図的に考えているわけではなかったが、子どもたちの文字への興味に応じて保育室内の文字環境が整えられていることがわかった。

写真１　幼稚園の絵本コーナー

写真２　保育園の絵本コーナー

写真３　保育園での読み聞かせ

写真４　幼児の読書の様子

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計５件）

①Shirakawa, Y., Hara, T., Muto, T. & Kanazawa, M. “Study on Preschool Children’s Learning to Read at ECEC.” EECERA, 2015年9月8日, Barcelona(Spain).

②原孝成・白川佳子・無藤隆・金沢緑・奥村智人　小学校１年生のリテラシーに及ぼす家庭の文字環境の影響（３）－保護者の読書行動及び読み聞かせに対する意識の検討－、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日（東京大学）

③白川佳子・原孝成・無藤隆・金沢緑・奥村智人　小学校１年生のリテラシーに及ぼす家庭の文字環境の影響（２）－児童期の文字環境の検討－、日本教育心理学会第 56 回総会、2014年11月7日（神戸国際会議場）

④原孝成・白川佳子・無藤隆・金沢緑・奥村智人　小学校１年生のリテラシーに及ぼす家庭の文字環境の影響（１）－幼児期の文字環境の検討－、日本教育心理学会第 56 回総会、2014年11月7日（神戸国際会議場）

⑤Shirakawa, Y., Hara, T., Muto, T. & Kanazawa, M. “ Study on Preschool Children’s Learning to Read at Home.” EECERA, 2014年9月8日, Crete(Greece).

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

特になし

６．研究組織

(1)研究代表者

白川　佳子（SHIRAKAWA, Yoshiko）

共立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：２０２５９７１６

(2)研究分担者

無藤　隆（MUTO, Takashi）

白梅学園大学・子ども学部・教授

研究者番号：４０１１１５６２

原　孝成（HARA, Takaaki）

鎌倉女子大学短期大学部・初等教育学科・教授

研究者番号：１０２９０６３６

(3)研究協力者

金沢　緑（KANAZAWA, Midori）

関西福祉大学・発達教育学部・教授

研究者番号：２０７３７２８３